

「玉砕」の桜

——アツツ桜とその受容——

はじめに

「日本の国花」を問われた場合、多くの人は「桜」と答えるだろう。それほど日本人と桜との関係は深い。小川和佑は「古代、桜は女性の化身、至高の美そのもの」であり、「豊穣と泰平を予兆する瑞樹なるがゆえに、平安王朝に桜文化を開花させた。その桜観は、江戸中期、歌舞伎の演出による桜花によって、武士の花に変質」、さらに明治政府の「軍事官僚らは政策として人びとの手から桜を奪って、彼らの軍国の花とし」、「太平洋戦争下では桜は青少年に死を強制する散華の思想の象徴となった」¹⁾と述べている。これらの指摘はもともとで、真珠湾攻撃の「特別攻撃隊」の一人、古野繁實の辞世「君のため何か惜しまむ若櫻散りて甲斐ある命なりせば」²⁾（傍点・内村、以下同様）

にも、「神風特別攻撃隊」の一人、宇佐美輝夫の遺書中の遺詠の一つ「特攻と散りゆく桜花吹雪晴れの初陣生還を期せず」³⁾にも「桜」がうたわれている。これらはいずれも「散華の桜」である。「散華」といえばその名を持つ小説が太宰治によって記されている。その冒頭を引く。

玉砕といふ題にするつもりで原稿用紙に、玉砕と書いてみたが、それはあまりに美しい言葉で、私の下手な書き物の題などには、もつたない気がして来て、玉砕の文字を消し、題を散華と改めた。

昨年、私は、二人の友人と別れた。早春に、三井君が死んだ。それから五月に、三田君が、北方の孤島で玉砕した。⁴⁾

内村文紀

〔新若人〕第五卷第三号、昭和十九年三月、旺文社、八〇頁

ここである「玉碎」とは、「昨年」「五月に」「北方の孤島で」とあるように昭和十八（一九四三）年五月二十九日の「アツツ島玉碎」のことである（発表は翌三十日）。これは太平洋戦争において大本営が唯一、公式に発表した「玉碎」である。同年五月二十一日に公表された「山本五十六の戦死」に続いての報であったため、国民に与えた心理的影響も大きく、その証左として、山田耕笈が「アツツ島血戦勇士顯彰國民歌」を作曲したり、藤田嗣治が《アツツ島玉碎》を描いたり、菊池寛、横光利一、坂口安吾、尾崎士郎、永井荷風、等の文士が何らかの形で文章を書いたり様々な反応が見られた。そうした中から秋田雨雀と伊藤整の「日記」を引こう。

新聞にアツツ桜の写真が出ていた。外見、桜のような形をしているが、北洋特有の強烈な紫赤色をふくんだものらしい。

（秋田雨雀『秋田雨雀日記』第三卷、昭和四十一年二月、未来社、三七六頁）

各新聞に、昨日頃アツツ島の初夏に咲くアツツ桜という高山植物の草花の写真が出ている。こういう草花を染めて血が流され、兵隊が死んでいるのだ。

（伊藤整『太平洋戦争日記』第一卷、昭和五十八年八月、新潮社、三四七頁）

いずれも日記の日付は六月三日。そしてともに「アツツ桜」と記されている。詳細は後述するがこの花は現在、花屋等で流通している「アツツザクラ（ロドリホクシス）」ではない。「アツツ桜」は伊藤整の記したように「高山植物」——サクラソウの一種であって、ソメイヨシノやヤマザクラのような「樹木」でもない。サクラソウは、園芸においては江戸時代から展示用の「桜草花壇」が作られたり、番付が作られたりといったように、また文学においても「我が国は草も桜を咲きにけり」という小林一茶の句が示すように、日本人にとって親しみ深い花である。これは「サクラソウ」という和名の由来が「花が桜に似ているから」ということと大いにつながりがある。その親しみ深さゆえに、サクラソウである「アツツ桜」は、戦時中「桜」表象の一端を形成していた。先の「各新聞」とみられる中から『讀賣新聞』と『朝日新聞』の記事を引く。

アツツ島に咲く「アツツ桜」——わが殉國の勇士がさう呼んでこよなく愛した花、學名ヒメエヅコザクラの一輪。六月……アツツの島に雪解けが始まるころこのアツツ桜の可憐の花が咲く。

（『可憐アツツ桜』、『讀賣新聞』昭和十八年六月二日朝刊）

誰が名づけたアツツ桜、アツツ桜はあたかもアツツ島勇士らの『散るが命の若櫻』の心意気を象徴してゐるかのやうに北の新戦場、アツツ島に咲き乱れてゐた

〔忠魂に映ゆアツツ桜〕、『朝日新聞』昭和十八年六月二日朝刊《東京》

『讀賣新聞』の記述、「ヒメエゾコザクラ」。これが秋山清の詩「白い花」などに現れる「ヒメエゾコザクラ」であると見て間違いないだろう（以下、引用を除き「ヒメエゾコザクラ」と表記する）。記事本文には「学名」とあるが、本来学名は「ラテン語」であるため、「和名」と考えられる。が、事典等を繰っても「ヒメエゾコザクラ」の名を有した植物は見つからない。秋山の「白い花」を「ごく普通の庶民の生活感覚、ささやかな日常の中の人間的感情を描くことで、戦争の非人間性を浮かび上がらせている」とし、「最高の文学的抵抗」と評した吉本隆明も、「その島に「ヒメエゾコザクラ」といふ花が咲き」と、ヒメエゾコザクラについて未知であることを窺わせている。

そして『朝日新聞』の記述に「『散るが命の若櫻』の心意気を象徴」とあるように「アツツ桜」は、「北方の孤島」に咲く「桜」として、「玉碎の象徴」とされた。ところがこのアツツ島は、昭和十七（一九四二）年に日本が占領するまではアメリカ領であり、「アツツ桜」と言う名は日本の占領後につけられた、ということになる。まさに「誰が名づけた」、なのである。

以下本稿では、「アツツ桜（ヒメエゾコザクラ）」そのものについて、をまず検討し、さらにそれが受容され、モチーフとなっている作品、特に佐藤春夫の「戦争詩」と、秋山清の「抵抗詩」を中心に考察を行う。

1. 「アツツ桜」の誕生

昭和十七年六月の「アリュールシャン作戦」に陸軍報道班員として従軍した写真家の杉山吉良は、著書『アリュールシャン戦記』（昭和十八年六月、六興商會出版部）の二一九頁に、「櫻草のやうな葉に、ピンク色をした櫻に似た小さな花をつける名も知れぬ花を、私達はアツツ桜と呼んだ」と記しており、同時期の『月刊讀賣』第一巻第二号（昭和十八年六月、讀賣新聞社）にも「アツツ島の思ひ出」と題し、「兵隊達が櫻に似てゐるのでアツツ桜と呼んで最愛した」との挿話を述べている。兵士らにとってアツツ桜は、まさに故郷の象徴そのものであったといえる。

さて、肝心の名付け親であるが、『朝日新聞』昭和五十四（一九七九）年十月二十三日夕刊の「アツツの花が取り持つ二人」と、昭和五十六（一九八一）年の『東京都医師会雑誌 8月号』に掲載されている宇井博の随筆「アツツザクラ」から、太田金次郎陸軍少尉とみられる。

この「アツツ桜」が当時の国民に知られるようになったのは、前出の杉山吉良によるところが大きい。「忠血染むアツツ桜」（『東京新聞』昭和十八年六月二日朝刊）の、アツツ桜の写真は

「嘗つて同島へ征つてゐた一報道班員によつて報道部へ寄せられた」という記述と、地方紙における談話から、杉山吉良がアツツ桜の写真を報道部に持ち込み、その名が全国へ広がったものと考えられる。談話からいくつかを引用する。「学名を、ひめえづこざくら」といふが誰が名付けたものかアツツ島の勇士達はこれをアツツ桜と呼んでこよなく愛してゐた、「他のどの花よりも早く咲く」、「大きさは略ぼ櫻と同じ位」、「ツンドラの斜面を桃色に色付けてゐる」、「或るものは押花として祖國への便りに収める」（以上、「英靈慰めよアツツ桜」、「北海道新聞」昭和十八年六月二日朝刊）、「たんぽぽ、あやめ、すみれ等に比べ一番愛されてゐた」（「忠魂凝るやアツツざくら」、「伊勢新聞」昭和十八年六月三日夕刊）。

さらに杉山吉良の戦後の随筆「アツツ島の花」（『望星』第十一卷一号、昭和五十八年十一月、東海教育研究所）によると従軍時に撮影した花の写真を「館脇博士に名を調べて、いただいた」とある。この館脇博士とは元北海道大学教授、植物学者の館脇操である。館脇は昭和四（一九二九）年にアツツ島へ赴いており、アツツ島占領後の『朝日新聞』昭和十七年八月二十一、二十二、二十五日朝刊に「研究の歴史」の大題で「アリユーシヤン列島の植物」の記事を連載していたり、他の雑誌にも当時の紀行文を寄せていたり、適任であった。そうすると館脇が「学名・ヒメエゾコザクラ」の名付け親であるということになる。以下、このことを少し考察する。

まず「学名」であるが、先述したように学名は本来、ラテン語である。本稿の中心たる「サクラソウ」にも、日本語で「プリムラ」と発音できる学名があるが、一般では馴染みが薄い。学術的な場でもない限り、わざわざ学名を用いることはないだろう。よって、聞き手であった杉山吉良が「和名」を「学名」と勘違いしたと考えられる。

次いで、「ヒメエゾコザクラ」に移る。『讀賣新聞』平成二十六（二〇一四）年四月二十九日朝刊の「アツツ桜の幻想」内では国立科学博物館名誉研究員の門田裕一の話として、秋山清の「白い花」を引きながら「ヒメエゾコザクラとは、北海道で見られるサクラソウの仲間、エゾコザクラのこと」、「アリユーシヤン列島のは小さいので、「ヒメ」とつけたのではないか」と紹介されている。確かに前半部については疑う余地がない。図鑑等との比較対象として戦時中の写真では不足だが、戦後に杉山吉良がアツツ島を再訪したのちに出版した「北限の花アツツ島再訪」（昭和五十四年九月、文化出版局）、あるいは「花」（昭和五十八年十一月、ノーベル書房）内の写真を比較対象としていただければ、おのずと同じ結論に達するだろう。しかし、後半については今一度考えたい。

館脇はアツツ島訪問を回想した文「皇軍占領下のアツツ島の思ひ出」（『旅』第十九卷第九号、昭和十七年九月、日本旅行倶楽部、十三頁）において「紅紫色のエゾコザクラ」と記しているように「エゾコザクラ」を実見している。なお、館脇のこの

文言は「北千島紀行」(「朝日新聞」昭和十六年八月二十日朝刊)にも見られる。杉山吉良と館脇の両氏が名を連ねている戦後の雑誌記事「アツツの花」には「丘の上にとこまでもつゞく可憐なエゾザクラの紅花」と記されている(この「エゾザクラ」は、「コ」が脱字したものとと思われる)。図鑑類における「エゾコザクラ」の花の色は、武田久吉の『高山植物圖彙』(昭和八年六月梓書房)では「紅色」、『原色牧野植物大圖鑑 続編』と『原色世界植物大圖鑑』では「紫紅色」と記されている。

これらに対して、新聞掲載の「アツツ桜の写真」は一見すると「白い」。白黒であることを考慮しても、とても「紅紫色」、紅系統には見えない。杉山吉良が記事中で述べた「桃色」が関の山だろう。ここで戦後、館脇が出版した『北國の花』(昭和二十二年八月、柏葉書院)の五六頁を見ると、「北海道野生サクラソウ属一覧表」ではあるものの、エゾコザクラの隣に「變種又は品種」として「シロバナエゾコザクラ」が記されている。前出の「原色牧野」一二七頁には「ヒメコザクラ」も掲載されており、こちらの解説には「小白花」とある。これから先の門田の説に加え、当時の館脇は、大きさだけでなく色味も踏まえて「アツツ桜」を既知の「エゾコザクラ」ではなく「やや異なる種」として、「ヒメコザクラ」の特徴も持ったエゾコザクラと定義したのではないだろうか。

アツツ桜が現地の兵士たちに愛されていたことは先に記したが、ここでいくつか実例をあげる。陸軍報道班員の深澤幹藏が

作詞し、唱和されていた『熱田進軍歌』の三番「あ、ツンドラに咲く花の／なんと可憐な美しさ／思はず止めたこの脚を／友よ笑ふないま行くぞ」。越崎清二軍曹が「小樽に住む兄に送ったアツツ島の押し花」の中に含まれていること。軍医として従軍し、アツツ島で最期を迎えた辰口信夫の「遺品の聖書に挟まっていた押し花」。

一方、内地において「玉碎以前にアツツ桜が紹介された例」は、管見の限りない。ただ、「みやますみれ、立藤草、櫻草その他我々の名前も知らない高山植物がそれこそ千紫萬紅、見廻す限りのお花畑を現出」や、これに類した表現を用いた文章が散見されるように、アツツ島の「サクラソウ」の存在は知られていた。といっても結局のところ「アツツ島兵士の手を離れたアツツ桜」は、あくまでも「サクラソウ」でしかなかった。

2. 「アツツ桜」の受容

昭和十八年六月二日の報道以降、アツツ桜は内地でも知られるようになったが、単に故郷の象徴としての受容はされなかった。そもその「アツツ島玉碎」報道について鶴田知也が『アツツ島』(昭和十九年六月、國民圖書刊行會設立事務所)の一頁で「全國民の心魂に徹しました」と述べているように、受容の方向性が既に決められていたのである。「北辺の孤島にあの英魂を慰める「アツツ桜」」、「この花は憎き敵アメリカ軍のために咲くのではなくあの孤島に魂魄として止まり大東亞戦のわ

が軍の必勝を信じ玉碎した勇士の慰めとして今年もよい花を開く⁽²³⁾」等、「英霊に寄り添うもの」、ひいては玉碎の象徴として。

「転換した象徴」は、主に詩歌の形をとって文芸に現れてゆく。奇しくも「アツツ桜報道」直前の六月一日、『河北新報』の夕刊記事「叙事詩の精神」における大池唯雄の発言「戦争を機縁として民族精神は勃興しつゝある。文學や歌謡は叙事詩の精神を取り戻さなければならぬ」と呼応するかのよう。

最も早く現れた文芸のアツツ桜は『新岩手日報』昭和十八年六月五日朝刊掲載の、宮澤賢治の主治医でもあった佐藤隆房による、主に十七音の短詩連からなる「アツツ桜」とみられる。全文を引用する。

- 1 忍冬のアツツ桜をまたで散る
- 2 アツツ桜戦陣訓の血を吸へる
- 3 アツツ桜霧はをたけび雨震ふ
- 4 七生のアツツ桜や島の鎮
- 5 アツツ桜大和男子の魂まつれ

『昭和十八年五月二十八日アツツ

ツ島に於て皇軍勇士全滅を期し

護國の花と散り鬼神となりぬ、

忘るべきにあらず』⁽²⁴⁾

(原文ママ、行頭番号は内村)

1、2では兵士の死を、3では死した兵士が鬼神となる様を、4では護國の鬼となる様をアツツ桜と重ね、5ではその魂をアツツ桜に慰めてくれと詠い、終わる。全体としてわかりやすいものとなっているがそれだけであり、類型的というのが妥当な評価であろう。この短詩と同頁には、土井晩翠の「山本元帥國葬」、伊波南哲の「江田島」などが掲載されている。

以下、いくつか「アツツ桜」が登場しているものを紹介する。

〔詩〕佐藤義美「アツツ桜の花なんか」、『週刊少國民』第二卷第二十五号（昭和十八年六月二十日、朝日新聞社）

〔隨筆〕阿部静枝「黙々たるの強み」、『同盟グラフ』第十一卷第七号（昭和十八年七月七日、同盟通信社）

〔詩〕百田宗治「アツツの櫻」、「少國民文化」第二卷第十号（昭和十八年八月一日、日本少國民文化協會）

〔詩〕穴田澄子「アツツ櫻」、「日本詩壇」第十一卷第八号（昭和十八年八月一日、日本詩壇發行所）

〔詩〕佐藤春夫「軍神山崎部隊長の頌」、「週刊少國民」第二卷第三十六号（昭和十八年九月五日、朝日新聞社）

〔詩〕菊池正「アツツ櫻」、「樺太山系」（昭和十九年五月十五日、詩と歌謡の社）

「少國民向け」が見られるのは、これからを担う「少國民への戦争教育」であろう。『少國民文化』第二卷第十号（昭和十八

年十月、日本少國民文化協會)の「軍人援護 少國民の詩と綴方作品」の「アツツ島の勇士に捧げる文」には「アツツ桜」が登場している。

さて、佐藤春夫には先述の「軍神山崎部隊長の頌」以外にも、同年の『三田文學』十月号掲載「あつづ嶋玉砕部隊鑑仰歌」、さらに昭和十九(一九四四)年刊行『奉公詩集』所収の「噫アツツ島」を合わせ、合計三編の「アツツ島詩」が存在すると従来は考えられてきた。ところが今回、「噫アツツ島」と類似表現が多く、なおかつ全集で言及されていない作品の存在を確認したため、次章ではそれも簡単に紹介しつつ、論を進める。

3. 佐藤春夫とアツツ桜の「戦争詩」

まず書誌情報を記す。

「アツツ島の英霊を歌へる」、「中部日本新聞」昭和十八年六月四日朝刊。

大題目として「玉碎頌」と記されており、詩の上部の画家・野間仁根によるアツツ島の全景とおぼしき挿絵と同じ囲み内に掲載されている。
次いで全文を引く。

- 1 奥太平洋上、北陸の一孤島
- 2 守備にありて敵は近く
- 3 祖國遙に郷信絶えたり

- 4 ツンドラ地帯なれども
- 5 愛國の熱血は凍らねば
- 6 志は日を経て益々堅く防備は全し
- 7 氷雪に埋れて久しく春暉を待つ
- 8 蓋し大に戦はんとなり
- 9 天日未だ春ならざるに
- 10 一朝敵兵は濃霧に乗じて
- 11 東、南、北、三方より來り
- 12 蒼蠅なす賤奴らは刻々に増援し
- 13 我に十倍す。地の利を占め
- 14 運び得て 物饒なり
- 15 海、空、陸、巨彈は飛んで
- 16 十方よりわが堡壘に來る
- 17 北陸、曉は早く暮は晚く
- 18 防戦の一日は永く反撃に暮れゆく
- 19 生死もと論ぜず勝算奮戦にあり
- 20 南八男兒、豈衆寡を問はんや
- 21 援兵を求めず彈藥を請はず
- 22 重んずるところ一命にあらず
- 23 悠久の大義に生きざるを耻づ
- 24 期するところは 一騎當千
- 25 戦陣訓を實踐せんのみ

27 相励あひそげして士氣いよく昂あがる
 28 我に剛毅沈勇の山崎大佐あり
 29 勇将の下弱卒なく その数すべて二千数百
 30 一夜肅として二旬の健闘善戦を相犒ねがひ
 31 皆瓦全を求めず 大義を望み玉碎に勇む
 32 敢闘に堪ふる者今僅に百数十名
 33 誓つて肉弾を敵陣に突入し
 34 白兵の一戦を期す
 35 病みて決戦の行に加はり得ざる者は
 36 皆切齒屠腹とくふくして一身を戦友に饒なまけ
 37 以て行を壯んにし
 38 魂魄をして隊伍にあらしむ
 39 生死を超越せる一隊は
 40 夜半マサツカル峠に殺到し
 41 大に敵が集團を壊滅せり
 42 山崎部隊長の報告は
 43 兵馬倥傯こうせんの間死を目前にして
 44 綿密詳細を盡し 行間おのづからに
 45 全員 敢闘必死の意あり
 46 一讀 北海の風雲最も迫れるを見て
 47 電波はアツツ島に到れども閑寂げんせきとして答なし
 48 蓋し神州の兵既に従容として悠久の大義に生き
 49 皆 護國の鬼と化して

50 地に一員をだに残さざるなり。
 51
 52 海波はマサカ湾頭より遠く祖國に寄せて
 53 いざ速かに蒼蠅さばへなす鬼畜を撃てといふ。
 54 噫 アリユウシヤンのアツツ島
 55 壯烈忠勇の士二千数百が墳墓の聖地なり
 56 二千六百三年五月二十九日以後
 57 奥太平洋の地圖は義を知る人何者か
 58 涙なくしてひらくことを得んや
 (行頭番号は内村)

「噫アツツ島」との詳細な本文異同等は稿を改めたいが、後半部に多くの異同が見られる。一つ例をあげるなら、47「電波はアツツ島に到れども閑寂げんせきとして答なし」が、「電波は一北に飛んでアツツ島に到れども／全島今は寂閑せいきん」として答「へーなし」(一一内が「噫アツツ島」)となっており、後者の方がリズムの点でも、詩的空間の広がりの点でも洗練されて感じられる。この「アツツ島の英霊を歌へる」が「噫アツツ島」の初出形というのは時期的にみても間違いないといえよう。また、「軍神山崎部隊長の頌」、「あつツ嶋玉碎部隊鑽仰歌」、「噫アツツ島」の「アツツ島詩」には、いずれも「アツツ桜」が現れているが、「アツツ島の英霊を歌へる」には現れていない。掲載されたのが六月四日の朝刊ということから考えると、二日から

の「アツツ桜報道」を受ける以前の作詩とみられ、改稿改題を施して『奉公詩集』に「噫アツツ島」として収録されたと考えられる。そこに挿入された「アツツ桜」は「鬼神を泣かしむる壯烈さ」⁽²⁶⁾、「一億の國民をして感奮興起せしむる精神の高さ」⁽²⁷⁾等を象徵する役割を果たした。あるいは、当時の読者の中には「海ゆかば」の一節「草生す屍」を想起した者もいたかもしれない。いずれにせよ、佐藤春夫にとってアツツ桜が玉碎の象徴となっていたということは確かだろう。

「アツツ島詩」三編に詠まれている「アツツ桜」は、それぞれ「軍神山崎部隊長の頌」では「語るべき人しなければ／かたれかし北斗の星よ／朱に染むアツツ桜よ／將兵ら玉と碎けし／血戦のマサツカル山」⁽²⁸⁾、「あつツ嶋玉碎部隊鑑仰歌」では「わななける北斗のしたに／咲きいでしあつツざくらを／朱にそめ　まさつかる山の／戦に率ゐともなひ」⁽²⁹⁾、「噫アツツ島」では「皆、アツツ桜を朱に染めなして護國の鬼と化し／地に一員をだに残さざるなり。」となっており、いずれも「アツツ桜は朱に染む」のである。「忠魂に映ゆアツツ桜」（『朝日新聞』昭和十八年六月二日朝刊《東京》）の文言「勇士らの忠烈の鮮血に染つたアツツ桜」等を受けての表現であろう。「朱に染む」は常套句であろうが、その「染む」花の色は前述の図鑑に記載されていたような「紅色」や「紫紅色」とは想定されていないようにうかがえる。報道記事の写真のような「白系」か、先述記事文中の「桃色」か、あるいは『毎日新聞』等にあるように「櫻色」か。

さて、先の三編を通読してみると、同じ題材を同じ志向性で詠っているがゆえの類型性は否めない。個人的には「噫アツツ島」がもつとも詩としての完成度が高いと考える。「國內の人々の悼みと感謝と誓ひを現す」⁽³⁰⁾ような文章が散見される中、かつて「ペン部隊」などで従軍した経験もあるからだろうか、この詩には「我かく思う」というような対象化、矮小化のまなざしは見られない。元々「アツツ島の英霊を歌へる」として玉碎直後に作られたためであろう詩人の熱量を内包したこの詩は、あたかも戦闘記録のように進む。この作中、詩人の眼は内地にはなく、「奥太平洋上、北陸の一孤島」、アツツ島にある。俯瞰的でありながら臨場感の伴った空間の広がり、そこで繰り返される文字通りの「死闘」。これを湿つぽさのない、熱く乾いた緊迫感漂う筆致で、アツツ島の兵士を、「ますらを」たちを猛々しく詠い、玉碎以後のアツツ島方面の地図は「義」を知る人には涙なしに開くことはできないのだと、「慟哭」へ至る。加えて、「南八男児」を引いているように、漢詩への造詣が深い佐藤らしい漢語の多用が、この言葉自体も漢語由来である「玉碎」をうたうにふさわしい重厚さを産み出している。「国民感情の代弁者」を自任⁽³¹⁾していた佐藤春夫の面目躍如といえよう。先に引いた大池唯雄の言葉を借りるならば、取り戻された「叙事詩の精神」の結晶といってもよい。

「軍神山崎部隊長の頌」は五七調の『悠久の大義』に生きた（大丈夫の鑑）への頌歌⁽³²⁾で、三度繰り返される「山崎大佐」が「軍

神」に昇華する過程を、スポットライトを絞りに絞って描写している。「あつつ嶋玉砕部隊讃仰歌」は五音と七音で構成されており、短歌で締められている。また、「つんどらに時じくの梅」と、アツツ桜以外の植物が登場しているが、アツツ島に梅はない。これは本来の意味での「紅一点」であり、詩本文の続く「日の本にものふありき」とともに、「部隊長山崎保代」を引き出す。アツツ「桜」と対応しての「梅」でもあろうか。「うた」という立場にある両詩だが、音数に縛られているように見え、いささか中途半端に映る。どちらにも「戦争詩」としての意味はあっても、純粹な「詩」として評価できるのは「噫アツツ島」くらいではなからうか。

4. 秋山清とアツツ桜(ヒメエゾゴザクラ)の「抵抗詩」

詩「白い花」は、戦後に刊行された詩集『白い花』(昭和四十一年)の目次頁から、昭和十九年に『林業新聞』に発表されたものが初出であるとわかる。その後、昭和二十四(一九四九)年に『詩文化』第十三号で再発表された。

再発表時の日本はGHQの占領下であり、検閲が行われていた。国立国会図書館憲政資料室所蔵の『ブランゲ文庫』内、「詩文化」(資料番号：VHI-S1084)を見ると、例に漏れず検閲されており、該当号では秋山の詩と西原寛治の随筆に鋭い目が向けられている。この号に掲載された秋山の詩は、アツツ島玉砕の「白い花」、南太平洋海戦の「拍手」、戦死した山本五十六の

「國葬」といずれも戦中(昭和十九年)に作られたとみられる作である。それらを英訳しタイプした検閲文書には、冒頭に「PRESS CODE : HEROIC DEATH ON ATTU」と記されているが、三作とも末尾に(Propaganda Rightist)とあることから、「白い花」が検閲の直接の原因というわけではないだろう。なお「白い花」内の「ヒメエゾゴザクラ」には「(a kind of dower)」と括弧でくくった説明書きがみられる。

秋山の「白い花」には佐藤春夫のもののような記録的描写は見られない。「ヒメエゾゴザクラ」も「ヒメエゾゴザクラの花がさき／その五弁の白に見入って／妻と子や／故郷の思いを／君はひそめていた。」と、元々の故郷の象徴としての役割で現れている。当時の「アツツ桜」のイメージはこれまでに記したように、血に染まっていた。「既に染まってしまっている花」に新たな思いを重ねることはできない。そこで秋山は、アツツ桜の「陰」となっていた「ヒメエゾゴザクラ」を用いたのではないだろうか。ゆえに「白い花」なのであり、思いをひそめるのみであるから、戦争詩や報道と異なり、花が血に染まっていないのだ。こういった点が検閲を逃れえた理由だろうか。「戦闘」の描写も「やがて十倍の敵に突入し／兵として／心のこりなくたたかいつくしたと／私はかたくそう思う。」の部分だけである。それに「かたくそう思う」に対して冒頭では、「アツツの酷寒は／私らの想像のむこうにある。／アツツの悪天候は／私らの想像のさらにむこうにある。」と、「わからない」ことも記

している。ここから、「詩文化」の同じ号の「拍手」の末尾「突如館内はそうぜんたる賞讃の拍手に湧いた。／私は目をとじた」⁽³⁸⁾と同様、秋山の抱いていた「戦争への距離感」を見出すことは難くない。しかも、「たたかいつくした」であろう「君の名」を山崎部隊長とは違い「誰も知らない」と、「華々しい戦死、軍神の死」ではなく「ひっそりとした戦死、一兵卒の死」をうたつてもいい。そういった「距離感」ゆえか、この詩はどことなく冷たい感傷を帯びている。秋山の静かな筆致が余計にそう思わす、見事な抒情詩である。

ところで、先にわずかながら引用した秋山清の「拍手」について少し触れておきたい。まず副題となっている「ニュース第一七三号」だが、実際は「第一七七号」とみられる。現在、インターネット上の「NHK戦争証言アーカイブス」で見ることができ(39)。その映像には魚雷命中シーン、爆弾命中シーンはあるが、添田馨が述べているような「特攻機」が体当たりするシーン(40)はない。そもそも今日一般的に想像される「特攻」は「神風特別攻撃隊」のことであろうが、件の特攻が組織的に行われ始めたのは「昭和十九年」であり、「拍手」の背景にある米空母「ホーネット」が沈没した「南太平洋海戦」は「昭和十七年」である。仮に「拍手」が「昭和十九年」の「特攻以後」の作であったとしても、魚雷攻撃の機能を備えた飛行機とされる「雷撃機」を「特攻機」と読み替えるのは正確ではない。

暮尾淳によれば、戦時中の秋山は「日本文学報国会」に入っ

ておらず、戦時中「自ら詩人でなくな」⁽³⁹⁾っている状態であった。大本営の語る真実から外れた作品、表現は許されなかった時代性を考慮すると、戦時体制の枠組みから離れて「目をとじた」からこそ、秋山は「血に染まっていけない、白いままの寂寞の玉砕詩」を作れたということもできるだろう。とはいえ、秋山の詩も、佐藤の詩も、「戦争詩」あるいは「反戦詩」を仮装しているかも知れないが、実際は括弧付ではない、現代の詩⁽⁴¹⁾である。詩人の魂の奥底から湧き出す真実の叫びである。佐藤春夫の「慟哭の叙事詩」と、秋山清の「寂寞の抒情詩」、ともに元は同じモチーフから出発しているが、二人の詩人が到達した場所は、全く異なる。ここに詩の面白さの一つがあろう。「戦争詩」だから、「抵抗詩」だから、といった思い込みは避けねばなるまい。

5. 戦後の「アツツ桜」

戦後、「アツツ桜」は混線してゆく。秋山の「ヒメエゾコザクラ」はGHQの「検閲」では削除されなかったが、プレスコードの存在もあり、占領期の日本ではアツツ島玉砕についての文章を含め、戦死した人間を讃えるような文章は発表されにくい時代であった⁽⁴²⁾。

日本の主権回復の翌年、昭和二十八(一九五三)年七月二日の『毎日新聞』の夕刊記事「面影をアツツ桜に」では、アツツ島に眠る遺骨を迎える派遣団に託された品として「面影をアツ

ツ桜にとめゆかむ」としたためた未亡人の短冊が紹介され、昭和三十九（一九六四）年七月二十四日の『毎日新聞』の夕刊記事「お花畑に戦跡訪ねて」では、慰霊祭が行われたアツツ島の描写の一つとして「日本軍が、アツツ桜」と呼んだ直径五ミリぐらいの桃色の花が咲きそろっている」と記されている。さらに、昭和五十九（一九八四）年と昭和六十一（一九八六）年の新聞記事には「アツツ島で撮影されたアツツ桜」の写真が掲載されている。

だが、本稿一章でも引いた『讀賣新聞』平成二十六年四月二十九日朝刊の「アツツ桜の幻想」に「今、販売されているアツツ桜は「ロドヒボクシス」という植物」とあるように、いつの頃からか「アツツ桜」は、その名前だけが一人歩きし、一般的には「ロドヒボクシス」のことを指すようになった。また、「戦争を知らない アツツザクラ」（『讀賣新聞』平成十九年四月二十六日夕刊）ではロドヒボクシスがアツツザクラと呼ばれるようになった由来を「アツツ島攻略を記念して、または玉碎の悲劇を悼んで、園芸店がこの花（ロドヒボクシスのこと…註、内村）を「アツツザクラ」として売り出したのが発端」としているが、ここまで見てきたように玉碎後というのが正しいだろう。

さて、昭和五十三（一九七八）年、「アツツ桜」を知らしめるきっかけとなった杉山吉良がアツツ島を再訪した。その一部始終は、前掲『北限の花 アツツ島再訪』に詳しい。同書七、

六二、六三頁に「アツツ桜」のカラー写真が掲載されている。いずれも「紫紅色」鮮やかな花である。

同年、歌人の鈴木英夫が『短歌現代』第二巻第十五号（昭和五十三年八月、短歌新聞社）に「アツツ桜幻想」と題した作品群を発表し、「箱根湿生花園にアツツ桜を見る」と記しているが、「現地との連絡絶えて渡るを得ず」ともあるため、鈴木は「アツツ桜」の現物を知らないと思われる。この件に関して、実際はどうだったのかということ箱根湿生花園にて尋ねたが、「当時の植物の記録は残っていないため、正確なことは不明だが、『ロドヒボクシス』を「アツツザクラ」として展示していた可能性が高い」とのことであった。ちなみに箱根湿生花園では現在、「外国の山野草と園芸種」コーナー（サビスヤード）にて、「球根性の丈夫な多年草。別名アツツザクラ。アツツ島とは無関係。」と記された立て札で「ロドヒボクシス」が展示されており、また季節にもよるが、その「ロドヒボクシス」の押し花を使った「あつづざくら」のポストカードがお土産として販売されている。可憐な花である。

ここまで「アツツ島玉碎」にまつわる、「桜」にふれた。最後にアツツ島以外の「戦地の桜」にも触れておきたい。事実上の「玉碎地」には「サイパン」、「硫黄島」などがある。そのうちのひとつ「ペリリュー島」では、昭和十九年十一月二十四日、「中川部隊長は、軍旗を奉焼し決別電報「サクラ・サクラ」を打電

して自決、残る将兵は遊撃戦に転じ悉く悠久の大義に殉じた⁽¹⁵⁾となつてゐる。一見すると、この電報の「サクラ」は「玉砕の桜」とも受け取れる。しかし、「中川連隊長が、大連での堀たち、事前説明を熱心にメモして、時には質問してきた姿⁽¹⁶⁾が、「強固な陣地」の構築につながり、「水際での早まった突撃はやめて、徹底した奥行の深い戦法で、米軍が奥に入ってくれば入るほど損害が多くなる戦闘を行⁽¹⁷⁾」う礎となつたように、「綿密に計画された持久戦」であつたことと、「サクラ・サクラ」の電報の五時間半前の「地区隊ハ本二十四日以降統一アル戦闘ヲ打切り、残ル健在者約五〇名ヲ以テ遊撃戦闘ニ移行 飽ク迄持久ニ徹シ、米奴撃滅ニ邁進セシム⁽¹⁸⁾」の電報を踏まえると、「玉砕」を是としていなかったことがわかる。以上から、決別電報の「サクラ」は「玉砕の桜」とはいえないだろう。生まれ故郷を思い、そして先に死んでいった兵士たちを、これから死ぬ公算の高い兵士たちを思い、「サクラ」を訣別の言葉に選んだのではないだろうか。

注

(1) 小川和佑『桜と日本文化——清明美から散華の花へ』（平成

十九年三月、アーツアンドクラフツ）二七二、二七二頁。明治時代の「軍国の花」については『桜の文学史』文春新書（平成十六年二月、文藝春秋社）一九七頁において「国民皆兵による国防軍を戦闘の専門職として強化するためには、彼らを専門職である士族に倣つて疑似士族化する必要があつた」、「国防軍の疑似士族化の中で、さらには王朝文化の華としてのさくらから、士族というよりも武士の精神のさくら、その死を飾るべき国華というふうになく異質なものに変質した」とある。

(2) 引用は、斎藤瀏「大東亜戦争と短歌」、「放送」第二卷第十二号（昭和十七年十二月、日本放送出版協會）四一頁。

(3) 知覧特攻平和記念会館編『新装版 いつまでも、いつまでもお元気で 特攻隊員たちが遺した最後の言葉』（平成二十三年六月、草思社）十一頁。

(4) 「玉砕」も「散華」も、ともに「戦死の美化表現」である。しかし「散華」は個人の死を指し、「玉砕」の「一億玉砕」、「玉砕山崎部隊」等に見られるような、集団性を有してはいない。なお、北川透は「文学の一兵卒——太宰治「散華」について」（『日本文学研究』第三十四卷、平成十一年一月、梅光女学院大学日本文学会）において、玉砕は「（『神国日本』の大義に殉じて、美しい玉のようにいさぎよく碎け散る）、散華は「仏教語ということの上に、個人的なニュアンスもあつて、神がかり的な意味に耐えられない」と記している。

(5) 吉田裕、森武磨、伊香俊哉、高岡裕之編『アジア・太平洋戦争

事典」(平成二十七年十一月、吉川弘文館)一五七頁にも「大本營が『玉碎』という表現を用いたのはアッツ島守備隊の全滅のみであり、ほかについては「総員壮烈なる戦死」という表現を用いて発表」とある。実際の報道としては「アッツ島に皇軍の神髓を發揮」、「朝日新聞」昭和十八年五月三十一日朝刊《東京》など。

(6) 櫻本富雄「玉碎と国葬」——1943年5月の思想」(昭和五十九年八月、開窓社)にも多くの文章が紹介されている。

(7) 「ロードヒボキシス」などと呼ばれることもあるが、本稿では箱根湿生花園(神奈川県・箱根町)に展示されていた名称「ロードヒボキシス」で統一する。なお、ロードヒボキシスは南アフリカ原産で「キンバイザサ科」の植物である。(サクラソウは「サクラソウ科」)

(8) 吉本隆明「日本でただ一人、戦争に抵抗する詩を書いた詩人」、『秋山清著作集 別巻』(平成十九年三月、ばる出版)七五三頁。

(9) 吉本隆明「抵抗詩」、秋山清「白い花」(昭和四一年十一月、東京・コスモス社)五九頁。既知であつたならば、「ヒメエゾコザクラが咲き」、あるいは「ヒメエゾコザクラの花が咲き」というようにするだろう。

(10) どの程度報道されていたかの調査(対象期間・昭和十八年六月一日〜五日)には、国立国会図書館収蔵の新聞資料を用いた。その結果、当時の全国紙三紙(毎日・朝日・讀賣)と『日本産業経済』、『東京新聞』、『北海道新聞』、『合同新聞』(岡山)では昭和十八年六月二日朝刊にアッツ桜の記事が掲載されていること、その後の地方

紙では『伊勢新聞』と毎日・朝日の大阪版を除き、基本的に中四国、九州でのみ報道されていたことが判明した。対象範囲は『鹿児島日報』での掲載が、昭和十八年六月四日夕刊であるため。

(11) 例えば「英魂に薫れアッツ桜」、「西日本新聞」昭和十八年六月三日夕刊には、「アッツ島上陸作戦に従軍した杉山吉良氏は同島において撮影のアッツ桜の寫眞を示しながら左の如く語つた」とある。

(12) ただし、細部においては「想ふも悲痛、いまアッツ桜の咲く頃」、「高知新聞」昭和十八年六月三日夕刊のように「ツンドラの斜面を黄色に」となっていたり、「ヒメエゾサクラ」「ヒメエゾコザクラ」と各新聞で微妙に揺れていたりする。

(13) 「杉山吉良と館脇操」については、平山周吉『戦争画リターンズ——藤田嗣治とアッツ島の花々』(平成二十七年四月、芸術新聞社)三三八頁〜三六六頁に詳しい。

(14) 写真・杉山吉良、記事・館脇操「アッツの花」「アサヒカメラ」第三十五卷第九号(昭和二十五年九月、朝日新聞社)四二頁。なお「エゾサクラ」とされる花の写眞は掲載されていない。

(15) 牧野富太郎『原色牧野植物大圖鑑 続編』(昭和五十八年五月、北隆館)では一二六頁。林弥栄、古里和夫監修『原色世界植物大圖鑑』(昭和六十一年四月、北隆館)では、八三四頁。

(16) 杉山正己『さよなら、また会う時まで』(平成十六年五月、杉山書店)二九六頁の写真には、文字通りの「桜色」をしたアッツ桜も多く見られるが、これが昭和四年、昭和十七年当時はどうだったのかという詳細は不明。同書における撮影日は八頁と二九四頁

から、平成四年七月五日か。

(17) 深澤幹藏『アリユーシヤン襲撃戦記』（昭和十七年十二月、大和書房）一一九頁。二一六頁には「櫻草はこの島で一番早く咲く花で、一寸見るとすみれに似てゐる。上陸日の行軍中に見た雪の中で咲いてゐた花はこれだつた」とある。この時点では、その「櫻草」が「アツツ桜」であるかの確認はできないが、相馬基編『軍神山崎部隊』（昭和十九年一月、毎日新聞社）四頁には「歌にうたはれたその花は、誰がよんだか、『アツツ桜』と名がついてゐました」とある。

(18) 杉山正己『一枚の写真を追つて アリユーシヤンを行く』（昭和六十二年八月、杉山書店）七七頁。

(19) 杉山正己、前掲『さよなら、また会う時まで』、二九二頁。

(20) なお、杉山正己、前掲『一枚の写真を追つて アリユーシヤンを行く』七六～七八頁の記述を参考に「アツツ島占領玉砕」までの『北海道新聞』と、全国紙三紙を調査したが、「アツツ桜」の報道は確認できなかった。

(21) 深澤幹藏『アリユーシヤン作戦従軍記』、『放送』第二巻第十号（昭和十七年十月、日本放送出版協會）三一頁。

(22) 「勇魂に咽ぶアツツ桜」、『毎日新聞』昭和十八年六月二日朝刊。

(23) 「手向の花 アツツ桜」、『合同新聞』昭和十八年六月二日朝刊。

(24) なお、『新岩手日報』で「アツツ桜」は報道されていない。

(25) 佐藤春夫『憶アツツ島』、『奉公詩集』（昭和十九年三月、千歳書房）二四～二九頁。

(26) 尾崎士郎「アツツ島の雄魂を憶ふ」、『放送』第三巻第十号（昭和十八年十月、日本放送出版協會）三八頁。

(27) 尾崎士郎、前掲、同頁。

(28) 佐藤春夫「軍神山崎部隊長の頌」、『週刊少國民』第二巻第三十六号（昭和十八年九月、朝日新聞社）三頁。

(29) 佐藤春夫「あつち嶋玉砕部隊鑑仰歌」、『三田文學』第十八巻第十号（昭和十八年十月、三田文學會）二頁。

(30) 阿部静枝「黙々たるの強み」、『同盟グラフ』第十一巻七号（昭和十八年七月、同盟通信社）二四頁。

(31) 河野龍也「佐藤春夫の足跡（年譜と業績）」、辻本雄一監修、河野龍也編著『佐藤春夫読本』（平成二十七年十月、勉誠出版）一六頁。

(32) 北川透、前掲論文「文学の一兵卒 —— 太宰治「散華」について」、九六頁。

(33) 大澤正道「木材通信社とアツツさくら」、『トスキナア』第一号（平成十七年四月、トスキナアの会）二八頁によると、「黒川洋の語では『林業新聞』の現物は今のところ未発見」であるらしい。

(34) 秋山清「白い花」、『詩文化』第十三号（昭和二十四年八月、不二書房）二八頁。引用は前掲『白い花』三〇頁。

(35) なお、他の「ヒメエゾコザクラ」の用例としては、安井信一の短歌「北海のアツツの島に咲く花のヒメエゾコザクラけふ知りにけり」村崎凡人編『軍神頌』（昭和十九年十二月、青磁社）二〇六頁、がある。文芸以外では、毛利秋俊『アリユーシヤン』朝日時

局新輯57（昭和十八年七月、朝日新聞社）十七頁に、高山植物の一つとして「ヒメエゾニコザクラ」が挙げられている。誤植と考えられるが、名称のみで何の特徴も記されていない。

(36) 秋山清「拍手」、前掲『詩文化』第十三号、二九頁。引用は前掲「白い花」二五頁。

(37) 「日本ニュース第一七七号」、『NHK戦争証言アーカイブス』
http://cg2.nhk.or.jp/shogenarchives/jpnews/movie/cg2das_id=D0001300562_00000（平成二十八年九月三十日閲覧）

(38) 添田馨「秋山清と戦争詩」、『現代詩手帖』第五十巻第十号（平成十九年十月、思潮社）三一頁に「特攻機が、敵空母に体当たりするさまをこのニュースフィルムは捉え」とある。南太平洋海戦において米空母ホーネットに体当たりした機は確かにあるが、『讀賣新聞』昭和十八年一月十四日朝刊、「止めの魚雷一發」によれば「火を噴いた日本機二臺が艦目がけて突込」んだとある。対空砲被弾により帰還が見込めなくなったために体当たりしたものともみられる。よって、いわゆる「特攻」ではない。

(39) 暮尾淳「日本文学報国会と秋山清」、『現代詩手帖』第五十巻第十号（平成十九年十月、思潮社）五一頁。

(40) 秋山と同様に日本文学報国会には入っていないが、逆の立場であった人物として影山正治が挙げられる。入会拒否の理由を「近衛の翼賛運動や東条の報国運動を昭和の公武合体運動として認めて居なかつた」と『不二』第二十号第三卷（昭和四十年三月、大東塾・不二歌道会）の六七頁で自ら述べているが、影山の言動は、

それが本人の意図したところかどうかは不明だが、「戦時体制の枠組みの中」にあったと考えられる。

(41) 北川透、前掲、八九頁。

(42) たとえば、「私は最も戦争を呪ふ。だが、特攻隊を永遠に讃美する。その人間の懊悩苦悶とかくて国のため人のためにさ、げられたいのちに対して」という記述がある、坂口安吾の「特攻隊に捧ぐ」は「Militaristic」として全文削除されている。当項の引用は、『坂口安吾全集16』（平成十二年四月、筑摩書房）七四三、七八八頁。

(43) 「玉碎の島」、朝日新聞「昭和五十九年八月二十八日夕刊『東京』と、父の面影を求めて」、『讀賣新聞』昭和六十一年七月十一日夕刊。

(44) 「かれんな星形の花 ロードヒボキシス」（『讀賣新聞』昭和四十九年六月十六日朝刊）にも「いつの間にかこの花はアッツザクラと呼ばれるように」とある。

(45) 「ペリリユー島守備部隊鎮魂碑」（茨城県護国神社・茨城県水戸市）

(46) 堀榮三『大本营参謀の情報戦記』文春文庫（平成八年五月第一刷、文藝春秋）一五七頁。

(47) 堀榮三、前掲書一四四頁。

(48) 防衛庁防衛研究所戦史室『戦史叢書 中部太平洋陸軍作戦（2）―ペリリユー・アンガウル・硫黄島―』（昭和四十三年二月、朝雲新聞社）二〇四頁。

（うちむら・あやのり／本学大学院博士前期課程）